



長谷 宗悦 (1954年高岡市生まれ、東京)

219.5×第6×第5.5  
木アクリル  
2002年

## 廃材が織りなす交響曲

空間を切り裂くように、無数の廃材が突き出している。高岡市出身の彫刻家、長谷宗悦が四年ぶりに発表した新作は、まず攻撃的な印象を目に飛び込む。終わりの見えない経済不況、増え続ける凶悪犯罪、世界を震撼させた米中核同時テロ事件……。この作品を手掛けた四年間の不安に満ちた空気に、牙をむかへて見える。一脈して細部の構成は、暴力的な輪郭とは対照的に計算された繊細さがある。

廃材は一つとして同じ表情の物はない。人間が時とともしわを刻むように、あせた色や歪みくずれがそれぞれの歴史を物語る。木を素材に抽象表現に取り組んできた長谷は、廃材の持つ時間の蓄積に魅力を感じ、十年ほど前から積極的に使い始めた。蚕棚のような壁面構成や絵画的なレリーフなど、その形態は新しい作品を発表するたびに変化してきた。

新作について長谷は「昔は『いいい(廃材)をどっしりやる』と書いていたが、今は『いいい(廃材)をどっしりほじのこな』と思うようになった」と語る。打ち捨てられた廃材の主張に耳を傾け、互いを結び付けた。その結果、個々の主張は息を添い、全体はオケストラのような張りつめた調和が生まれた。

長谷の作品は題名や説明がない。言葉によって意味が限定されることを嫌ったため、見る者は、純粋に視覚的、空間的な存在と向き合わざるを得ない。それこそが本源的な美術という行為ではないかと作者は問いかけている。

(高岡支社編集部・松波利枝記者)

10月27日まで高岡市美術館で開催中の「長谷宗悦1983—2002」(同館、北日本新聞社主催)で展示している。